

の茶輸出港がある。しかも其秀麗なる風景は古來詩情豊なる日本人の胸に何者を印したらうかそこに羽衣の傳説が生れたのも無理からぬ。近くは一代の文學者樗牛の墳墓の地となり遠くは戰國の俗人家康がそこに世を忘れた。現在にても東海道鐵道旅客をして競つて窓側に集らしむ

濱邊づたひのみち草

如舟老人

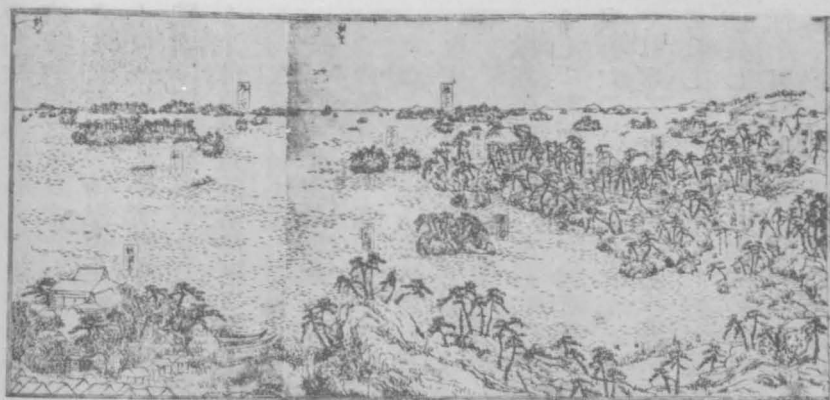
るといふのは三保の松原の故にか見ん人の心優しき故にかわからぬが私共は天地あるがまゝに由つて起る地勢の所以を默思する地學者でまた變つた面白味を感せずには居られないのである。

(横山)

一、奥羽の夏の濱邊

歐洲歸航數旬の海程に受けた雜多の印象を齎らして神戸に着いた時に郷里の親戚が出迎へて呉れたのは嬉しかつたが、その目的は單な歡迎ではなくて、秋田の南本莊附近の金山を鑑定してほしいとの希望で、終に歸朝後一月も經ぬのに久しくはき慣れた味の忘れられた草鞋掛の旅行を奥羽の地方に試むることになつた。黒澤尻から下車して仙人鐵山を遙かに眺めつゝ人力車

で横手に出た。温泉めぐりみち草に記した如く關山峠を越え能はなんだ後六年目に分水界を越えたので頗る愉快で、昔の雄勝柵が何處かも知らずに林檎園の間を縫ふて御物川上流の平野を横ぎつて淺舞に一泊し、それから枯梅雨と聞いたらに拘はらずそぼ降る雨を冒し、山間の名物秋田露の大きな葉に滴る露に全身を濡らして鑛山を見て矢島に泊り、焼いた岩魚を土産にして貸切馬車で本莊を通り、行手果てなき砂濱に出



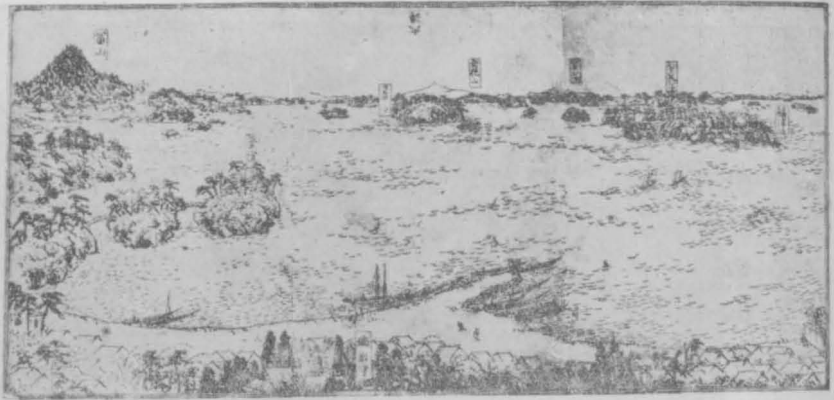
た。

此の一直線の海岸は高い砂丘が臺地を成し其麓が急斜して海に入る處であるから、左手に遙かに寒風山を望みつゝ行くのであつた。此の砂地に辛うじて生ひ立つ草の疎らな處に石を置いた板葺屋根の村又た村を

通つたのは自分の初めて経験した日本海岸の風景で、此の頃誰かが帝展に出した砂丘の油繪に對して再び當時を想ひ起さざるを得なんだ。之と共に深く刻まれた印象は家ごとに干す大きな帆立貝の乾物と其の晩十餘里を突破して八郎潟の湖畔の宿で食卓に上つた鱒の刺身の味である。

今一つの不思議は平坦な道路で馬車屋がのろのろと馬を歩ませながら、晝食に休憩する筈の秋田市街に入つて急に意勢よく喇叭を吹いて疾驅したことで、どう／＼曲り角の荒物屋のガラス戸に馬を打ち當て、顛覆せんとしたが、驚いて怒鳴る聲も出ぬ主人に目も呉れず又た一言も詫びずに、破れたガラスの損害もそのまゝに又た馬に鞭つて驅け出したことであつた。段々考へて漸く此の邊の人心の素朴なので此んな事件は毎度繰り返されても雙方共に餘り意に介せぬものと結論する外なかつた。

この旅行後五年目に滿洲從軍中に知り合つた友人の依頼で牡鹿半島のスレート山を視察する

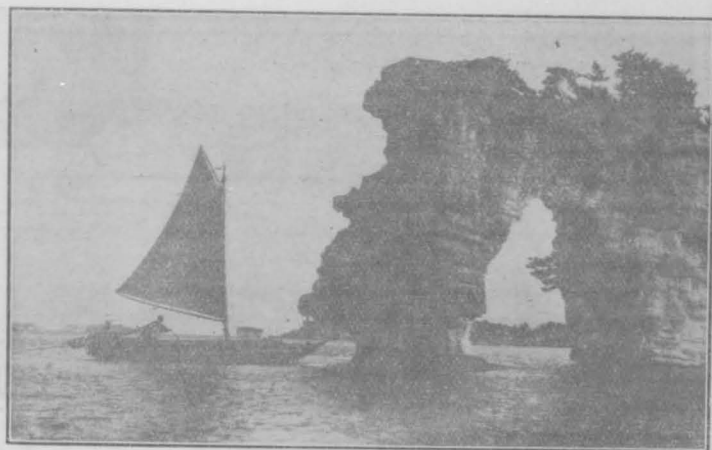


濱邊つたひのみち草

べく仙臺から鹽竈を経て石ノ巻港に渡り、分流する北上川の河蒸汽船で雄勝灣まで往つて歸路には石ノ巻から松島に渡つて歸つたことがある。此旅行も亦た忽々として唯一の交通の便を利用した通り掛りの瞥見であつて、日

本三景の一を遊覽するといふ餘裕がなく、從つて航海の安全を祈るといふ鹽竈神社の下で晝食の間に旅館の樓上から灣の一角を眺め、神さびた神社の石段を見たのみで賽拜もせなんだ。此の時も梅雨の未だ晴れぬ頃で半ば煙霧に鎖された無数の島嶼の間を通航して雨中の風景を楽しみ、歸航には松島に上つて晴れ渡つてもまだ浴衣の薄きを怯れる海風の涼味を取り、瑞巖寺に獨眼龍の雄姿を拜し、邱上から多島海のパノラマを大觀し前に船口から近く仰いだ青松を戴き白崖を露はした島々を池中拳大の庭石の如くに眺めて雨奇と晴好との兩様絶景を對照し得たのは今も忘れられぬ眼福である。(上圖參看)

此の數日の往復に於て今に印象を残した一つのエピソードは篠衝く雨中の北上川の航路で河蒸汽船が突風に飄弄されて左に右に傾く時に、思はず發した船長はぬかといふ不安の疑問の聲が高かつたのか、大聲で船長は私ですと答へて顔を機關室から出した犢鼻褌一つの大男を見た一件で、奥羽地方の南船北馬の旅行で感じた



島 木 材 所名島松

所は日
本海と
太平洋
との地
貌風景
の對照
よりも
此の船
長と前
の馬車
屋との
方が遙
かに面
白かつ
た事
ある。

挺を武器として山中で日を暮らした後に田舎宿に着く時の追憶である。ドウラン——我々の學生時代にはリュツザツクは未だ輸入されず、一九〇三の維也納開催の萬國地質學會議に井上(禱之助)博士が參列の時にベツケと一所にアルプス巡檢をされた記念に持ち歸られたのが多分我々仲間での嚆矢であつたから——に入れた岩石の標本の重量が一步步々に荷重を増す様に覺えつゝ、疲れた脚を曳きすつて木立の茂つた林中の闇路を辿る時、突然黒い人影が見えて近寄つて來るのはこわくもあり嬉しくもある。

國府津から小田原を経て石垣山の下を通つて眞鶴ヶ崎の突角を横ぎつて短い冬の日を暮らしたのは此の如き經驗の一つであつた。近寄つて馬を曳く村人であるのを知つて吉濱までの里程の近いのに再び勇氣を鼓し、やがて門川の宿屋に着いて十四五の小娘が甲斐々々しく草鞋の紐を解き温湯で足を洗つて呉れたのでホツト一息して樓上に登つた。薄暗い石油ランプの下で一日の觀察を日記に認めて夕餐の後に薄い蒲團の

二、伊豆の海岸

想ひ出して面白いのは學生時代の草鞋掛の旅行であるが、ことに忘れ難いのは單獨に鐵槌一

中に夢を結んだ。がその前再び薄暮の林下の路を想ひ出して丁度當時流行したリットンの小説中で其の頃も餘り人に知られぬ Disowned [勘當]



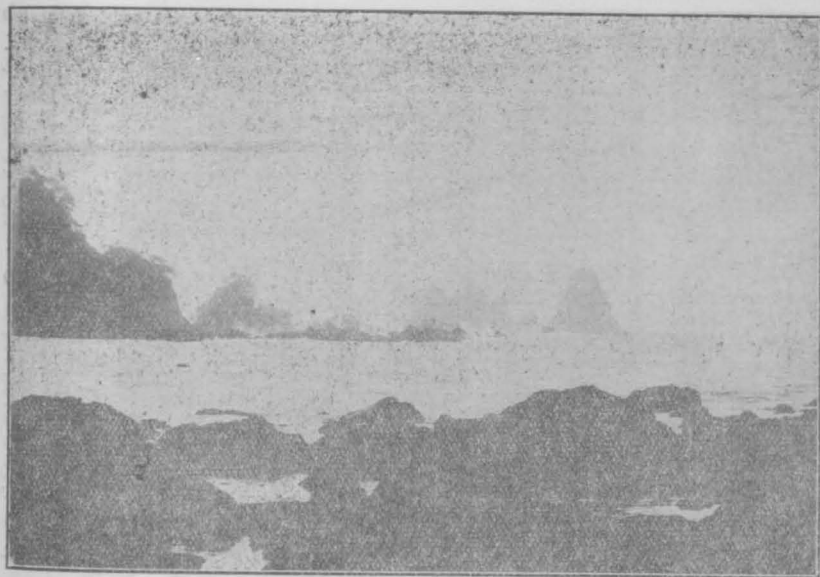
伊豆海岸 天草採集ノ光景

と譯すれば適當でないが日本に對譯の語がない様である。いふもの劈頭の讀んだ少年主人公が林中で日を暮ら

してデブジーの群を發見し、一夜を其の夥伴の中に過してデブジーの娘の世話になる場面が眼前に浮んで来て、暫くは自分が此の小説の主人公になつた様に感じた。

伊豆山熱海伊東を経て伊豆東岸の大小の阪路を越す間に見る風景は冬も餘り寒くなく晴れ渡つた初島が近く見え、大島に時々噴く煙が柵引くのも天氣の靜穩を語るが如く、面倒な阪路の勞れを忘れて歩いた。此の路で稻取に着く途中で岩石を採集する時に地質圖を置き忘れて、二三町の路を大急ぎで引返したのに、見當らぬの村のある方へ行つて小供の影を認め聞く積りであつたが、小供等は地質の色彩を繪どでも思つたか二人で廣ろげ種々評定して居たので直に取り返し得たのは此の海岸旅行のエピソードとして記憶に残つてゐる。

伊豆の海岸で最も風景の好い處は下田港から西南に突出した石廊崎である。此の風景は安積良齊の記載した名文もあるが舟を雇ふ錢を惜んで賀茂から山越しに松崎に行つて南方で一番心



伊豆石廊崎

持ちの好い宿屋に一泊した。海水浴には絶好の場處であるが冬の旅であつたから唯だ松樹を隔て、海を眺めたのみである。

試みに良齋の遊豆紀勝か會心の文章を左に列載して茲に述べた所を補ひ、又た見ざる所をも紹介する。

從小田原左折、沿海入山、細路嶽巖、林莽蔽虧、其下潮水激石而跳、

葦濱村沙磧擁灣、翠松蔭映、風濤之觀甚壯、踰網代嶺、絕頂清泉一泓、大旱不涸、

……土人稱爲一杯水、……儒生謁精著書、欲以博一名而不易得、可笑也、

從見高登舟、東風正急、帆腹怒張、舟行如飛、甚適也、

海濱草舍數十烟、曰河津、……行二里砵山無樹、趾插海、巨穴羅列、洪瀾噴薄、

曰繩地山、又行一里、捨舟至白濱村、峭壁對峙如門、劣通人、過村則崖壁爲波濤所蝕嚼、如城郭、如樓櫓、如五層塔、

至下田港、……港口環匝、如六摺屏風、

中雨峰高而圓、曰乳峰、……海水泓澄、
島嶼離立、曰睢鳩、曰白鷺、西崖丘陵、
雲木參天、清水上總介城墟也、……日已
下春、夕陽帆影、明滅巒光水色之間、極
爲秀麗可玩、

(長津呂)自港登舟、港在兩山之間、屈曲
如峽、西爲石廊、……兩涯狂峰怪巖、
詭態萬狀、或粘空而立、或擘海而起、其
下潮水奔滙、泓澄瑩徹、魚蝦尾鬣皆露、
大抵兩山當千古風濤之衝、皮膚消剝、神骨
獨存、爲嵌、爲巖、爲峰巘、爲洞穴、爲
奴貌奔驥、爲危塔穹閣、如蟲蝕、如刀
鑿、玲瓏削峭、無一圓刃者、……翠松
挾罅而生、骨緊膚薄、故嶽巘虬曲而不得
肥、又爲海風所壓、故斜倚倒懸而不得伸、
……誠宇內絕景也、
踰山至堅岩村、路傍危巖拔地傑立、高數
百丈、豈以此名村歟、其南石峰巖然粘空、
互爭雄俊。

此の記事は後に讀んで一文惜しみの失策を悔

のだが、當時下田から松崎から下田に出る途中
蛇石の近傍で面白い集塊岩の擧立する奇景を觀
たのから推して、此の石廊崎の風景が安山岩集
塊岩の海蝕作用で成つたものたるを考へた。果
して然りとすれば七ツ釜が玄武洞を海岸に移し
たものたると同じく、此の絶景は耶馬溪を此の
太平洋の突角に置いたものと言ひ得る。良齋の
名文があつても耶馬溪の如く世間に知れぬは交
通の不便なためまことに遺憾である。

然れども幾度行つても眺め飽かぬのは沼津の
東南半臥山から靜浦を経て江ノ浦、重須おもむの入江
に至る間で、軟かい第三紀層凝灰岩の邱陵と之
を貫いた岩脈の地質上の關係が面白ければかりで
なく、此の岩層の海蝕作用で出來た風景は小規
模であるだけ親しみがあつて人を牽き着ける。
海岸傳ひの路傍に青く透き做つた海水を通して
海參の簇棲する状態の如き、小松の生えた小島
に白い鷗の飛び廻る光景の如き、夏冬とも面白
く、ことに稀に見る所の雪景色に至つては全く
畫の如しと形容する外はない。

三、熊野の浦々

自分の郷土の風景で最も面白いのは熊野の浦々で、潮岬から勝浦に至る間の橋杭岩が海中に點々と列峙するのは火山岩脈の風景として日本では他に類例を聞かぬ一奇觀であり、那智の瀑布が八十丈と稱するのは、廬山瀑布を李白が形容した詞に似たとしても、海に面した垂直の斷崖から落下する壯觀、特にその白色の岩壁と暗紺色の杉樹、瑠璃色の澄み切つた瀧壺は同じく他に類例なく、華嚴の瀧と色彩を比較すればネグロとブロードの美人との對照と極言し得るのみならず、海上から遙かに一條の白練が日光に輝くのを望むのは尙更に類例がないと誇つても強ち國自慢にはなるまい。

然れども此等の奈良朝以來誰にも知られた風景にも増して我々の面白く感じたのは新宮以北の海岸である。十二月の末に一挺の獵銃を携へた未だ斯學を専門と極めぬのん氣な旅行を熊野地方に試みた時に、渡船で新宮から鶉殿に渡れば三重縣界を越えて木の本まで五里の海岸の熊

野に唯一つの平坦な街道に出る。寥寥たる浪音を隔てた赤松林の内側に沿ふた珍らしく廣い一直線の石英砂の道路は珠を敷いたかと思はれ其の上を往來するあらゆるものを頭に載せた野娘、蜚婦の盡く口にする棒の葉卷煙草、その行き逢ふ時に交はず「おあがんな」、「のんし」といふ挨拶、村人の昇いだ荷物が此の松林の綠色に反襯する紅幾點——鯨の獵のあつた後に村々に持ち歸る鯨肉の大切れ！——地方的底調、地方的色彩どれもこれも別乾坤に入つたと感ぜられたのである。

此の平定海岸を歩き盡して木ノ本に達する前に石英粗面岩質の火山岩の海蝕を受けた斷崖が路の上に突起してゐる處に來る。此處は有馬村といふ伊弉冊尊の御陵といふ傳説がある土地で木柵を環らした塋域があつて、岩崖にかけて注連繩を張つてゐる。十月の祭には五色の菊花をこの注連繩に挿むので花祭といふ。此の塋域は林木蒼古の趣を持つてゐるが、特に人目を惹くものは垂直の一枚岩の岩面に自然に淺く穿たれ

た花の窟と呼ぶうつろで、其の形状は廂髪の婦人の胸像の凹型の如く見え、或は之を女神の御像として崇拝したのが傳説の起原であるまいかと想はれる。

此の岩崖の海に臨む突角の上端にはまた獅子岩といふ神樂の猿猴面をのまゝの形に浸蝕された奇巖も峭立してゐる。花の窟もこの岩も共に波浪によつて削られて生じた岩面の凹凸が、その高く地盤と共に隆起した後、永い間海風に晒されて之に吹きつける石英砂の砂吹き *blowing sand* によつて凹凸が更に尖つた角を成して不思議な形状となつたらしい。是から遙かに南の古座川河口から少し上流の溪間に牡丹岩といふのを見たが、これも同じく水蝕の後に砂吹き作用が加つて出来たものらしい。

中村君が本誌(第一卷第六號)に紹介された田邊近傍の海岸から東南岸一帯に極めて狭い洪積層が發達してゐるが、この沿岸堆積物の出来たと略ぼ同時の海岸の崖が其の後砂吹き作用を受けてゐるものらしい。

なほ本ノ本の東に突出した岩崖には鬼ヶ窟といふ平らな岩盤の上に海蝕洞窟を成した處もあつて打ち寄する波間を窺つて磯傳ひに見物に行つた。波浪の凄まじく打ちつけるので心膽を寒からしめる壯觀であつた。現に波浪に彫刻されつゝある此の凹凸と比較して、海岸に行はれる風の警力が如何なる結果を岩崖に及ぼすかを理解し得た。

本ノ本から東北の伊勢志摩の海岸は明治三十四年鳥羽圖幅の調査の時に旅行したが、本ノ本の北に突出するリア式の海岸は同じく白色の火山岩で、新鹿(新鹿)三木浦九鬼浦等の深い灣入であつて、戰國時代に熊野沿岸航海の船舶を脅威した海賊のゐたのが地理的位置と形勝の地貌とに起因するを知るに足る。

何時も此の旅を憶ひ出す端緒となるのは獵銃使用の失敗である。親切な村人が案内して呉れた海岸の鴨のある中へ發砲して散弾が水中に散落した楕圓の痕跡が鴨から半分に足らぬ距離にあつて、且つ假令届いても何の損害もこんな

小禽撃ちの鐵砲が與へ能はぬことを覺つた。この無鐵砲の試みに反省して初めて携帶した十字字信介氏の銃獵術の小冊子を熟讀して、鳥の種類によつて銃の口径散彈粒の大きさ、火藥の填裝量等を決定選擇せねばならぬことを知り、其の後寫眞器械を使用する時にも同じ要領たるに鑑みて旅行前に必ず開閉器其の他の調攝を試みた上で携帶する注意を加へ、此の失が種々な場合に好教課となつた。

此の後は何時も鴿やツグミを狙ふことにして朝晩宿屋の近傍の森をあさつて時には幾羽かの小禽を獲て夕餐の食膳に添へ得た。のみならず化石などでも採集の好果は何時も巢窟を狙ふにあるといふことも此の旅行の教課に負ふたから、獵銃は荷物になつたばかりでなかつたといふ負け惜しみの辯解も出來たのである。

四、瀬戸内海

瀬戸内海の海岸旅行で得た印象の第一は横山先生指導の下に夏季二週間に淡路を一周して沼島に渡り、福良の西の門崎に行つて鳴門海峡を

俯瞰した旅行である。洲本福良間を連ねた一線以北の淡路海岸は狹岸ではあるが單調で、唯だ岩屋から簾の間の須磨明石に對する海峡沿岸のみが頗る眺望が好く、小繪島の孤島が此の單調を破つて特に風景の美觀を成してゐる。是から東岸に沿ひ洲本に至つて初めて松林が灣に臨んだ海水浴及び避寒の好海濱を見る。西岸では福良は名の如く深い海灣に臨み小さいながら心地好い港で、此處の旅店が全旅行中の汗を流し足の勞れを忘れしめた處であつて、先生は御國柄だけに出した菓子皿を長崎古渡りの和蘭陀陶器と鑑定されたので特に此の旅館の主人の趣味をゆかしく感じて、淡路一周中の傑作として記憶されてゐる。

此處から一直線に和泉砂岩の山角が西々南に突出したのが門崎で、山稜は全く馬の脊の如くなつて、一徑を通ずるのみであるから、時々は脚下に波浪の碎けるのに躊躇する處もある。然れども其の突角に出た時には腋下に清風を受けて一泓鏡の如き海面を隔て、對岸の島や山を望む

の絶景は他に比類のないものである。此の日は生憎小潮で鳴門の湍流の奔激する壯觀を見ることが出来なんだ代りに、此の小潮の流を利用して海峡を出る小艇がぐるりと一回轉して此の難處を突破する光景を目撃したのが一興であつた。

干潮の時に内海と外海との水面が此の海峡で一直線に段違ひをなして海水が渦を卷いて流れる壯觀は近頃南葵育英會の催しに徳川侯爵に陪遊した時に初めて之を睹た。

紀淡海峡を横ぎつて由良から紀州加太への渡船は此處で見た小艇と同じもので、前日の低氣壓を経てまだ静まらぬ海面に大きなうねりが外海が壓倒し來るのを横ぎつて行くので、舟は木の葉の如く翻弄されて、山の如き高浪の谷に降るのは奈落に入るが如く感ぜられ、友ヶ島の奇岩或は家根の如く或は柱の如く或は帆檣の如く亂立する間を行く奇觀は面白いよりもおそろしく、唯漁船が同じく波間に出没するので天候の安定を知り此の波浪の恐るゝに足らぬを知つて

稍安堵し得たばかりであつた。

先生が大汽船では平氣だが此の小舟は氣持が悪るいといはれたのを負惜しみかど當時は思つたが、その後ビスケ；灣で其の後日露戰爭に沈没した常陸丸舷頭を打ち越す大うねりを經驗して初めて大船に乗つた心持を覺つて先生と同感を引き起さざるを得なんだ。

明石海峡を通つて播磨灘に入つた時に幾度も望見したのは小豆島の寒霞溪であるが、幾度も月光の下に聳ゆる山谷、朝靄に包まれた峯影を見るのみであつて、秋晴に乗じて登攀して山頭の眺望を恣にしたのは二回しかない。下村を早朝に出て登るに従つて紅葉の色の濃くなる林の上に種々の面白い安山岩集塊岩の巉巖が峙立し其の間を流れ落ちる溪流の清いのと共に秋景の興味は頗る濃やであるが、これだけは紅葉狩毎に經驗する所であつて、寒霞溪の最も人心を爽快ならしめるのは其の溪間の山路を攀ち盡して絶頂に登つた處にある。

東から南にかけて廣い播磨灘を隔て、遙かに

淡路及び讃岐山脈の山麓の起伏するを望み、北は播磨の山嶽の下に茵の如き平地の縁取つたのを俯瞰し、瀬戸内海の島嶼岬角盡く林泉中の飛石の如く見えるのが面白く、大小の船舶の往來は蟻の如く、内海の最も廣い部分の大觀が此處で取られるのである。

前に石廊崎で耶馬溪を太平洋の突角に持つて行つた者としたが、寒霞溪も亦た耶馬溪を内海の中央に据へた者と看られ、此處は兩者に獨特な壯觀とは全く異つた一種の風景を呈してゐる。之と相對して讃岐の側に同じく安山岩が五劍山と屋島の山上に露はれて、各其の形態の奇を競ふてゐる。屋島の讃岐海岸に於ける位置の重要なるは源平の戰爭に明かであるが、阪道を登り盡して熔岩臺地の平坦な頂上に出た眺望は一種特別の面白味がある。菅公が讃岐守となつた時から開らけた田野の縦横に碁盤目を成し、又た處によつては周の田制に田園に慮あるといふのに等しい小さい民家が散點してゐるのが俯瞰され、又た海岸に沿ひ鹽田の散布するのも地圖

そのまゝに見られて面白く、日本で最も人煙の稠密な平地が脚下に展開してゐるのである。

讃岐の平地で發見したもので平安朝の大陸文化の遺物と認められるのはカンカン石即ち讃岐岩の^ト出る國府産地の近傍に使用されてゐる一輪車であらう。支那で盛んに使用する此の車が日本に傳はつてゐないのを不思議と思つたが、此處と廣間岩國間の地方だけには殘つてゐるのから推せば全く傳はらなかつたのでなくて、何時か二輪車に變つたものらしい。山陽海岸の方では一輪車の梶棒の先の方で上に屈つてゐると全く同じ形の二輪車があるのでその變遷の徑路が察せられる。今一つは大陸の鋸で、日本に普通行はれる鋸の手前に引くのと反對に前方へ押すものが大陸に行はれて、日本にはその行はれた形跡を認め能はな^レだが、嘗て甲斐の惠林寺で夢窓國師開基の堂宇建築の時に使用した鋸が保存されて、細長い支那の材木屋に見る通りのものであるのを發見した事がある。山中と海岸とに此の如き名残りを認めたのは面白い對照である。